

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

(42)

私たちが子どものころ、「女の人は五葉山に登ると災いが起きる。台風が来たり、冷害になったりする」と教えられていた。

その世界大戦も終戦を迎え、国民総出で日本の復興に努力した。私たちも勤労奉仕だけの毎日だったが、何とか中学校の卒業証書だけはいただいた。

そんな言い伝えを信じ、地域の女性たちが五葉山に登ることは恐ろしくなかったであろう。また、「災害が続くと男衆が五葉山に登って農作祈願をすることもあった」とも聞かされていた。

その春、地元の大嶽(あまたけ)青年団に入団した。青年団活動として地域への奉仕や全戸を対象にした家庭防疫など、年に二、三回は地域を回った。男女の共同作業は楽しみもあった。

私たちが育った時代は、第二次世界大戦の真っ只中であつた。B29(米爆撃機)の爆音や釜石への艦砲射撃の地響きの中、学校から帰った時の恐怖は今でも記憶から離れない。

ある日、青年団の集会があり、議題は五葉山登山の件だった。団長から「以前と変わって女の人にも五葉登山ができるようになった。みんなで登山してはどうか」という提

案が出された。

みんな大賛成した。出稼ぎの団員が帰郷するお盆休みに実施することが決まった。参加者は男女合わせて四十名になった。

待ちに待った登山の日。まだ見たことのない

て行く。

だんだん林が薄くなり、明るくなった。すぐ頂上かと思ったら、ここから二時間ほどかかると言った。女性も強かった。男性に負けじと頑張る。

やがて、目的の頂上に着いた。大きな歓声が上

続くように祈らずにはいられなかったはずである。

五葉山に生息する高山植物を観賞しながら夕飯時を待った。夕方、山小屋に集まり握り飯だけの夕食をとった。

旨いおかずがあるわけでも酒があるわけでもないが、みんなで食べた握り飯は旨かった。その後、ロウソクを灯してザ

り、そのうち、ゆらゆらと海面を赤く揺らしながら、空へと渡っていく。

やがて、水平線から黄金の光を放つ太陽が顔を出す。強い光が山々に広がる。胸が熱くなった。

「万歳、万歳。誰もが叫んだ。みんなで手を揚げていた。あれから五十七年、いまだに喉に焼き付いている。

【執筆者プロファイ

七十六歳。住田町アツモリソウ研究会会員。アツモリソウのバイオ苗を五年間で開花に成功させる。風景写真に魅せられ、その撮影に神経を集中させ、一枚一枚に思いを込める。

里の人々が崇めた名山

住田町上有住 松田 誠

五葉山の風景を頭に描きながら出発した。檜山の登山口から坂道を上り、林道に入る。何百年も風雪に耐えてきた立派な

松、クマザサが広がっている。山頂の窪みに冷たい水がわずかに流れている。真夏の登山者にとっ

て寝た。

早朝、団長の声で目を覚ました。日の出を拝むため外に出ると霧がかかって何も見えない。足元を確かめながら、やっとの思いで岩場が上がった。まだ霧が晴れない。

大雪に耐えるため、根をがっちり張って生きている。その根が登山道の階段になっている。アスナロ(桧)の樹林の中に吸い込まれるように登っ

みんな五葉山神社に手を合わす。あの時、みんなは何を祈願したのであろうか。おそらく、この平和な日々が未来永劫

「頼む。晴れてくれ」という思いが通じたか、だんだん霧が薄くなって、辺りが見えてきた。海も見えて来た。

少しずつ海が赤くな

少しずつ海が赤くな

少しずつ海が赤くな



ブナが林立する五葉山麓森林浴公園広場の頂上部

リレー
エッセイ